

首里城・玉陵探訪記

八木厚之

1. はじめに

私が以前教鞭を執っていた中学校教育の社会科の授業において、沖縄についてどのような内容を生徒に教えていたか紹介する。

地理的分野では亜熱帯性の南西諸島気候区の地域であること、農業ではサトウキビやパイナップル等の栽培が盛んであること、美しい海やサンゴ礁等の自然を生かした観光産業が盛んなこと、アメリカ軍基地があること、台風銀座であること等である。

歴史的分野では、尚氏が三山を統一して琉球王国を作ったこと、日本、中国、朝鮮、東南アジア等の間を行き来する中継貿易で栄えたこと、薩摩藩が江戸幕府の管理下で琉球王国を支配したこと、明治維新の琉球処分のこと、第二次世界大戦の沖縄戦では犠牲者が多かったこと、戦後はアメリカ軍政が行われたこと、1972年(昭和47)日本に復帰したこと等である。

そのような予備知識を持って、2009年(平成21)8月6日(水)に首里城とその周辺の遺跡群を見学した。折しも台風8号が、先島諸島を通過中で沖縄本島的那覇でも強風が吹く中での見学となった。しかし、幸いなことに降雨は小雨程度であったので屋外の見学もそれほど苦にはならなかった。

また、首里城正殿に塗られた朱漆が、南国の太陽の光、台風や塩分を含んだ海風等にさらされたことにより復元当時の光沢が減少してきた。そのため、きらびやかさを復元させるための朱漆塗り替え作業が行われているところであった。

2. 沖縄の歴史について

本論のテーマである首里城が、日本文化、中国文化を融合しているが、そのようになった経過を知って頂くために沖縄の歴史を述べたい。

1) 旧石器時代～貝塚時代

沖縄本島南部で「港川人」の骨が発掘され、カーボン測定法では約18,000年前のものとされている。このことから旧石器時代には人類が生活していたと思われる。紀元前5,000年頃の縄文土器の一種が出土していることから、本土と同様に縄文時代へと移っていった

と考えられる。しかし、縄文時代後期には土器の形式が著しく変化し本土の文化から離れていったと考えられている。弥生時代になると沖縄からも弥生土器は出土しているが、稲作は行われていなかったと考えられている。

では、稲作が行われなかった理由と食料はどのように手に入れたのかという疑問がわいてくる。その理由は、大きな河川がないために水田を潤すための豊富な水の確保が難しいこと、水をひいてくるかんがい技術が発達していなかったこと、地中には琉球石灰岩が多くあり水はけが良いため大地の保水力が乏しいこと、鉄製の道具が無かった等の要因が考えられる。

食料は豊富な自然から得ていたと考えるのが妥当であろう。現在の沖縄本島南部は開発された結果自然が乏しい状態にある。しかし、本島北部はやんばるの森林が広がり自然はまだ豊富である。そのことから考えると植物性の食料として果実類やイモ類、動物性の食料として鳥類等を森林から、魚類、貝類、海草類をサンゴ礁が広がる海岸部から手に入っていたのではないだろうか。つまり、自然環境に食料を求めて生きていたのではないだろうかと考える。このような生活を送っていた紀元前5,000年頃から11世紀末期頃までの時代を貝塚時代と呼んでいるが、本土では弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代と時は流れていたのである。

2) グスク時代

11世紀末期から12世紀初頭頃に沖縄はグスク時代に入ると考えられている。この時代の遺跡から炭化した米、麦が出土することから、これらが栽培されるようになったと考えられる。穀物栽培が行われるようになった理由は、自然の湧水を利用して水田や畑を作ったのではないだろうか。そして、本土の弥生時代と同様に支配層が現れ、その後支配層の中で淘汰が進み、按司と呼ばれる首長が出現し地域的な支配を強めていった。その按司たちは、それぞれグスクを築き勢力争いの戦いを繰り広げたとされる。

この時代に沖縄の社会が急速に発展した要因として考えられることは、先ず周辺の国や地域との交流であろう。それらの地域より水田耕作の技術が沖縄に伝えられたこと、また同様に鉄器の道具を製作する技術も伝えられたことが考えられる。これらの技術は、中国や本土より伝えられたと考えることが妥当であろう。しかし、本土からそれらの技術が伝わったと考えることは少し無理がある。その理由は本土から沖縄に人的交流があったとする史料が見当たらないことである。倭寇と呼ばれた武装して東アジア海域で海賊行為を行った九州や瀬戸内地域の土豪や漁民等の活動は、もう少し時代が下がった14世紀頃に始まったと考えられるので、時期が合わないのである。

もう一つの沖縄に影響を及ぼしたと考えられる国は中国である。12世紀に北方の満州族

が金を建国した。この金が漢民族の宋を侵略した結果、宋は江南に移り南宋となった。

この南宋は、陶磁器の輸出を盛んに行っており沖縄の遺跡から南宋の陶磁器が出土する。従って、この人的交流によって水田耕作技術や鉄製の道具を製作する技術も伝わったのではないだろうか。

3)三山時代

14世紀には、沖縄本島で勢力争いを繰り広げていた按司の中から、支配地域を拡大した有力な3人の按司により3つの勢力圏が形成された。沖縄本島北部を支配した今帰仁按司は、今帰仁グスクを拠点に北山と呼ばれる勢力圏を、本島中部を支配した浦添按司は浦添グスクを拠点に中山と呼ばれる勢力圏を、本島南部を支配した大里按司は島尻大里グスクを拠点に南山と呼ばれる勢力圏をそれぞれ形成した。これら3人の按司はそれぞれ王を名乗ったことから、三山時代と呼んでいる。

1368年中国では元が滅び明が建国された。3人の按司は明の皇帝に朝貢して冊封体制に組み込まれた。それぞれが対立しながらも琉球国王として明の保護を受けるという複雑な状況となった。

4)第一尚氏王朝

南山の支配下にあった按司の思紹とその息子の尚巴志は、1406年浦添グスクを攻めて中山王の武寧を滅ぼし思紹が中山王となった。その直後に尚巴志は中山の拠点を浦添グスクから首里城に移した。首里城はこの事件以前から建造されていたと思われるが、この時に本格的に首里城が整備されたとされている。

1416年第一尚氏王朝2代目の王となっていた尚巴志は今帰仁グスクを攻め北山王を滅ぼし北山を併合した。次いで1429年尚巴志は島尻大里グスクを攻め南山王を滅ぼし沖縄本島の統一が成し遂げられ、ここに「琉球王国」が成立したのであった。それと同時に首里城は琉球王国の王城となった。

5)第二尚氏王朝

1469年第一尚氏王朝7代目の王である尚徳が死去した直後に首里城でクーデターが起こった。このクーデターで対外交渉長官であった金丸が王位に就き尚円と名乗った。「尚」の姓であるが、血筋は別のものであるため尚円を初代の王とする王朝を第二尚氏王朝と呼んでいる。

3代目の王である尚真王の時代が琉球王国の黄金時代と言われている。外交面では、明より冊封を受けたがそのときの儀式は首里城で行われた。儀式は中国音楽をBGMに中国語で進行され、この儀式の中で明の皇帝の詔勅が読み上げられ尚真王が琉球国王であることが宣言されたようであった。このような国家レベルの外交儀式を行う関係から、首里城

が中国の建築様式を至る所に取り入れていると考えられる。

内政面では、沖縄本島の各地で依然勢力を保持していた按司を首里城下に集めてそこに住まわせた。按司は家族や家臣も自らの領地より首里に連れて来た。次に按司を階級別に分け国王に仕える家臣とした。その結果、按司たちのグスクは機能しなくなり、廃城となったのものも多かったようである。

1494年首里城の近くに円覚寺を創建して琉球仏教の拠点としている。これは尚真王が政治上の支配者であるだけでなく、宗教上の支配者になろうとしていたのではないであろうか。また、王家の陵墓として玉陵を造営するなど、精神世界の面でも支配者として力を発揮したと考える。

3. 首里城について

首里城は琉球王国の政治、外交、文化の中核として450年間栄えた城である。第二次世界大戦の沖縄戦で破壊されたが、1992年に大正時代に撮られた写真や明治時代の修復作業の資料を元にして高良倉吉により復元された。また、NHKの大河ドラマ「琉球の風」が放映されたことにより、広く国民に首里城が知らされることとなった。

2000年首里城は「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」として、玉陵、園比屋武御嶽石門とともに世界文化遺産に登録された。そのために日本人のみならず中国や韓国、アメリカからも多くの観光客が訪れていた。

それでは、私が見学したときの様子を述べることにする。

ゆいレール首里駅からバスに乗り換えた。首里城前バス停が今回の目的地の首里城に最も近いのであるが、首里城の建つ丘の斜面の勾配や距離を自分の足で歩くことにより実感したかったので、首里城口バス停でバスを降り首里城に向かって石畳の坂道を上った。坂道を上りながら、この丘も戦いの際には城を守る機能をもつ城の一部であることを認識した。さらに坂道を上り首里城の標識に沿って左に曲がりしばらく歩くと、二層式八脚門の守礼門が出迎えてくれた。

守礼門は中国式の門であるが、沖縄独自の技法も取り入れられている。沖縄特有の赤瓦で瓦と瓦の間を漆喰で固めてある二層式の門であった。普段はその二層の屋根の間に「守禮之邦」の扁額が掲げられているが、残念ながら私が訪れた時は台風対策であったのかその扁額は取り外されていた。

守礼門をくぐり少し歩くと、世界文化遺産に登録された園比屋武御嶽石門が左に見えてきた。この石門後方の御嶽と呼ばれる聖地を礼拝するため、1519年に第二尚氏王統第三代尚真王が創建した琉球石灰岩で造られた石門である。琉球国王が城外に出る際には、この

石門の前で安全を祈願したと言われている。昨年私が観光だけを目的としてこの場所を訪れた時に、この付近の住民で首里城と関係の深い家系の人なのか、この石門の前でお供え物をして祈っている女性を見かけた。

さらに道を上っていくと首里城の城郭に入る第一の門である歓会門があった。これは1477～1500年頃に創建されたと言われている。この歓会門の上部には立派な櫓があり、門前の左右には石獅子が鎮座している。また、門の左右から高さ約4～5mのほぼ垂直にそそり立つ石組の城壁が延びていた。その城壁は門に人が流れ込むようなアーチ型の形状を呈していた。首里城が敵兵に攻められたときには、この最も前まで攻めてきた敵兵が門の前で滞留してしまうであろう。そこを城壁の上から攻撃すれば敵兵を包囲殲滅させることができるであろう。歓会とは訪れた人を歓迎するという意味であるから三山が統一された後は外国の使節等を迎えたのであろうが、豪族同士が戦っていた時代には堅固な城として機能していたことが想像できる。

正殿方向に向かって歩いて行くと、それまでのなだらかな勾配と違い少し急な勾配の石段の道に変わって行った。その先が第二の門である瑞泉門であった。この瑞泉門の上にも櫓が造られていたが、その左右の石組みの城壁は直線的に造られていた。また、瑞泉門の前にも石獅子が置かれていた。

瑞泉とはめでたい泉という意味である。この門の手前向かって右側に瑞泉という名前が



首里城正殿（左側は漆塗り替え作業が行われていた）

付けられた湧き水があった。この湧き水は龍樋と呼ばれる龍の彫刻の口から流れ出ていた。この龍の彫刻は1523年に中国からもたらされたものであるらしい。沖繩戦で上顎部が破損したが、その後修復され今日の姿を見せている。この龍は首里城の数ある彫刻の中で唯一現存しているものである。

さらに上ると短い石段があり、それを登り切ったところに漏刻門があった。門の左右にはやはり高い石組みの城壁が続いていた。門上の楼中にあった漏刻とその門を通った広場にあった日時計により時刻を計り、太鼓を打ち鳴らして時を知らせたようである。また、駕籠に乗ることを許されていた役人もこの門前で駕籠から降りるのが通例であったことからかご居せ御門とも呼ばれた。

漏刻門を通り広場を右に曲がって進むと広福門がある。この門は左右に役所の建物が付随して建てられ、壁面の朱漆が華やかさと威圧感を見る者に与えるようであり、これまでに通ってきた門とはかなり趣を異にしていた。この門に付随する建物には社寺仏閣を司る寺社座、戸籍や治安を司る大与座と呼ばれる役所が置かれていた。

広福門を通ると下之御庭と呼ばれるかなり広い広場があり、正面には宗教的儀礼を行ってであろう首里森御嶽があった。

その首里森御嶽を正面に見て左に進むと正殿に至る最後の門である奉神門があった。この奉神門は、正殿の前に広がる御庭と取り囲むように建てられた一連の建築物の一部である。先ほどの広福門より規模が大きく威容な様相を呈している。

奉神門を通ると御庭と呼ばれる広場に入る。この御庭は、東西40m南北44mの広さで首里城のほぼ中心に位置しており、首里城でもっとも重要で厳肅な空間であったと言われていた。奉神門の中央の通路の延長上に浮道と呼ばれるオレンジ色の磚が敷き詰められた通路が正殿中央に伸びている。また、浮道から直角に近い角度で左右にオレンジ色の磚と白色の磚が交互に帯状に敷き詰められている。このオレンジ色と白色の帯状の磚が敷かれたものは、浮道からは直角に近い角度で伸びているが、正殿の前面のラインに並行である。また、御庭は地形からくる制約やこれを囲む建物が何度も再建されたことにより規矩平面を呈していないこともあり、浮道は御庭に西面している正殿から西に伸びているが北に約10度振っている。

この磚敷きのオレンジ色と白色の帯状のものは、儀式等の際に諸官の配列の基準となるものであった。映画ラストエンペラーの溥儀の即位の儀式で、諸侯が大和殿前の広場に整然と整列してひれ伏した場面を思い浮かべるとわかりやすいと思う。但し、紫禁城には首里城のような帯状の色分けしたものは無く、このような視覚的支援になる色分けをしたものは首里城だけであろう。

正殿は、琉球国王が政治や儀式を行う最も重要な建物であった。資料や発掘調査の成果によると、消失や再建を繰り返してきたようである。現在我々が見ることができる正殿は、1989年(平成元)に復元工事に着工し1992年(平成4)に公開されたものである。高良倉吉が『昭和の初期に首里城正殿の解体修理を行った際の図面が文化庁の資料室にあった。また、18世紀中期に正殿の大規模な修理が行われたことは知っていたが、そのときの工事報告書にあたる古文書が沖縄県立芸術大学の鎌倉コレクションから出てきたのである。』^(註1)と述べるように18世紀中期の正殿が復元されたのであった。

正殿は朱漆に壁面が彩られた美しい建物であり、龍頭棟飾等中国の建築様式の影響が強く感じられたが、正面中央の唐破風など日本の建築様式の影響も感じられた。ただ、私が首里城を訪れたときは、漆の塗り直し工事の真っ最中であったので作業用の足場が組まれていた。自然の風雨にさらされていると漆もはげ落ちてくるようであった。次回訪れるときには、光り輝く朱漆をまとった正殿を見られることを期待している。

正殿の前に石製の龍柱が一对向き合って立っている。柱に巻き付くように描かれた龍は数多く見られるが、龍のみが立っているのはこの大龍柱だけである。この大龍柱も復元されたものであり、太平洋戦争の沖縄戦で被害を受けた大龍柱は沖縄県立博物館に保管されている。

次に御庭を取り囲む建物内部の見学に移り、番所から入り南殿2階の展示室に入った。第二尚氏の歴代国王の肖像画が展示されていたが、そのどれもが白黒で彩色はなかった。

また、国王の冠であり中国皇帝から下賜された皮弁冠のレプリカや琉球王国時代の美術工芸品が展示されていたが、展示物は期待したほど多くはなかった。その理由は、『1609年春に首里城を占領した薩摩軍は、10日間にわたって城内の宝物を略奪し、戦利品として鹿兒島にもち帰った。1879年(明治12)に王国を廃して沖縄県を設置した明治国家は、首里城内に保管されていた膨大な文書類を接収して東京に運んだが、不幸なことにその接収文書は関東大震災で焼失するという憂き目に遭っている。王国の崩壊により生活に困った首里城のエリート層は、自家に伝わる家宝を二束三文で売り払い、その遺産は本土市場に出回った。また、沖縄戦に勝利したアメリカの軍人たちは、焼失を免れた文化財を大量に持ち出している。』^(註2)ということであろう。

順路に沿って進み柱や壁面が朱漆で塗られた正殿1階に入った。その中央には床面から約40cm高く造られた玉座である御差床を見学した。御差床前の2本の柱には朱漆の下地に黄金の龍が描かれていた。この龍の指は4本であり紫禁城に描かれている龍とは少し違う。紫禁城に描かれている龍の指は5本であり、それは皇帝を意味する。

また、御座床から離れた見学場所の床面の一部がガラス張りになっていて、発掘調査で

検出された地下の14世紀の首里城の基壇と考えられる石積みを見学できるようになっていた。首里城関係の遺跡で世界遺産に指定されているのはこれら地下の遺跡群であるので、それについての説明を記したものを設置して頂きたいと思った。

2階に上がるとそこにも玉座である御差床が造られていた。一つの建物内に二つの玉座がある例は世界でも珍しいものである。2階の御差床は床面から約65cm高く造られていた。その前の2本の柱には「金龍五彩之雲」が描かれ、国王が座った椅子のすぐ前には一対の金龍柱等があり、首里城の中で最も華やかな場所であると思われる。

順路に従い北殿に入ると首里城についての年表等のパネルや正殿と御庭において行われたであろう儀式の様子の模型等が展示されていた。ミュージアムショップもここに置かれていて、商品も充実していたので来館者の高まった購買意欲も満たされたことであろう。

4. 玉陵について

玉陵は、首里城の西北西約0.5kmのところにある1501年に尚真王によって築かれた墓域2,442m²の琉球王国第二尚氏の陵墓であり、2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」として世界遺産に登録されている。琉球石灰岩の石材を用いた石造で墓室は3室あり東室はほぼ北北東を向いているが、中室と西室はほぼ北東を向いている。中室は琉球の葬り方の特徴である洗骨前の遺骸を安置する墓室である。東室には洗骨後の王と王妃を葬られ、西室には墓前の玉陵碑に記された洗骨後の限られた王族が葬られた。

東室の東側の壁上、東室と中室の間の円塔上、西室の西側の壁上の3カ所からそれぞれ1体ずつ都合3体の石獅子が陵墓を守るかのように墓前を見下ろしていた。沖縄という土地柄からシーサーと思われることが多いようであるが、私はこの3体の石獅子を鎮墓獣として置かれたのではないかと思う。首里城を見学して随所に中国文化の影響を受けていることを感じた。陵墓についてもそれ自体を守るために鎮墓獣を置くという考えも理解できるであろう。また、玉陵碑に玉陵に葬られるべき人を規定しており「それに背くならば、天に仰ぎ、地に伏し崇るべし」とあり、このことからこの3体の石獅子は鎮墓獣として置かれたのではないかと思う。

玉陵の石高欄は一面に龍、鳳凰、獅子、麒麟等が彫られており、首里城と同様に中国文化の影響を感じさせるものではあるが、首里城には鳳凰、獅子、麒麟等は私が見学した範囲では、どこにも描かれていなかったと思う。なぜ玉陵には鳳凰、獅子、麒麟が描かれたのかはわかっていない。しかし、私の考えは、首里城は琉球国王の政治、生活の場であり、中国では、龍は国王を表し鳳凰は王妃を表す。従って、玉陵の石高欄には鳳凰も彫られているのではないか。それなら獅子や麒麟は何を表すのか考えると、西室に葬られた玉陵碑

に記された王族を表すのではないであろうか。

また、王と王妃は東室に、玉陵碑に記された王族は西室に葬られた理由について、私の考えを述べる。権力の象徴と考えられた太陽は東から昇るので、王と王妃は死後の世界でもその権力を維持できるように、そして現世においての権力は後継の国王に継承されると考えたのではないだろうか。太陽を重視したことは首里城で漏刻とともに日時計により時刻を計ったことや、琉球王国を支えた交易を可能にした太陽観測から生み出された航海術からも推測できる。

玉陵について興味深いのは、本来葬られることがなく洗骨前の遺骸を安置する墓室である中室に一人の遺骸が葬られておりそれが誰なのか不明であることである。それについての私の考えは、その遺骸は、王や王妃、王族ではないが、王の側近の人物であろうと思う。玉陵に葬られる人は玉陵碑に規定されていて、第二尚氏歴代の国王の中でも第2代尚宣威、第7代尚寧は玉陵に葬られていない。これは国王間の権力争いが関係していると考えられる。それでは、歴代国王でも玉陵に葬られない国王が存在するのであるから、王族に関しては玉陵碑の規定が厳格に守られたであろう。従って、玉陵碑が国王、王妃、王族だけに関して規定されたものであることから、逆説的に考えるならば国王、王妃、王族以外の人物ならば例外も許されるのではないか。しかし、王、王妃、王族でもない人物であるので、東室にも西室にも葬ることができず、中室に葬られたのではないだろうか。

5. まとめ

首里城、玉陵について見学したときの記憶とそのときに撮影した写真を基にそれぞれの特徴等を述べてきた。その中でも特筆すべき点は、琉球王国の石造彫刻の技術の高さである。沖縄では琉球石灰岩が産出され、それは彫刻を施すには適した素材であったと考えられる。首里城瑞泉門では琉球独特の石積みの技法を用いるために、一つひとつが幾何学的に表面処理された上で構築されたであろう。歓会門の石獅子や玉陵の石獅子では曲線や曲面を活かした彫刻の技法が用いられ、正殿前の石龍柱や瑞泉門前の龍樋では直線を活かしたデザインを基調とした上で、龍の鱗の一枚一枚を多くの細かい曲線を多様して表現する技法が用いられたのであろう。但し、これら石造彫刻の技術は琉球石灰岩を手に入れやすいという条件だけで華ひらいたものなのだろうか。これら石造彫刻の技術は、中国からもたらされたものと考えられる。先に述べたように、三山時代から沖縄本島の有力な按司は明に朝貢し冊封体制に組み込まれていた。そのような国際情勢、社会情勢の中で石造彫刻の技術が伝わったのではないだろうか。

首里城の建築様式や色彩豊かな装飾のみならず、石造彫刻の分野でも中国文化の影響が

大きいといえるのではないだろうか。

また、日本の文化の影響を受けたと考えられるのが円覚寺である。日本の禅宗様式を基本に建築されたものである。しかし、これも純然たるものではなく中国の様式も取り入れられていた。

このように中国と日本との外交や交易から中国文化と日本文化を取り入れそれらを融合させて華ひらいたものが琉球文化である。

(やぎ・あつゆき = 京都府立桃山養護学校)

注1 高良倉吉「琉球王国」(岩波新書『琉球王国』)2007年、p.186

注2 高良倉吉「琉球王国」(岩波新書『琉球王国』)2007年、p.188

参考文献

高良倉吉「琉球王国」(岩波新書『琉球王国』)2007年

外間守善「沖縄の歴史と文化」(中央公論新社『沖縄の歴史と文化』)2007年

高良勉「沖縄生活誌」(岩波新書『沖縄生活誌』)2005年